



# 男は 痛い



國友万裕

第24回

『ぼくは明日、昨日の  
君とデートする』

## 1. トラウマの地への帰還

久々に里に帰った。九州新幹線に初めて乗った。京都から乗り換え込みで4時間弱である。昔は5時間くらいかかっていたから、確かに便利になった。とは言うものの、俺の方は昔に比べると体力が落ちている。4時間は長く感じた。退屈をしのぐために直木賞受賞の『月の満ち欠け』を帰省前に買った。お土産にバームクーヘンを京都駅で買った。車内販売では、シャーベットとアイスコーヒーを買ってしまった。出先から京都駅まで行くタクシー代が2500円くらい。新幹線が着いた後、駅から実家までのタクシー代が1000円くらい。なんかかんかでお金がかかるなあー。新幹線代だけでは済まないのだった。

しかし、1回は帰らなくては、あまりにも親不孝だと思っていた。俺は母とは毎日電話で話し、母は俺のFacebookも見ているのだが「私ももうすぐ80なんだから、たまには帰ってきてくれないと」と日頃漏らしていた。思えばもう3年くらい帰っていない。20代まではしばしば里帰りしていたが、30過ぎてからは少年時代のトラウマが逆流してきて、夏休みや正月であっても帰る機会は少なくなっていった。俺の里は去年地震が起きた街なのだが、地震の時も帰っていない。この連載にも何度も書いてきたけれど、俺にとって故郷はトラウマの地。故郷は遠きにありて思うものではなく、遠きにありて憎むものだったのだ。

「でも、それでよかったじゃないの。こっちに帰りたくないという思いが強かったからこそ、どれだけ辛くても京都に踏みとどまっ

て、ここまで来たんだろうから。」と母は言ってくれている。僕の母は母の鏡みたいな人なので、僕を理解し、受け入れてくれる。亡くなった父は、頼りない人だったが、根っからの善人ではあったのだ。とはいうものの、本当に色々なことがあった家庭だった。俺は15で心が壊れて、不登校になり、あの時は家族全員を戦争に巻き込むことにもなった。母も、俺が不登校だった頃は親戚たちの中でも肩身の狭い思いをしたはずだった。あの当時の不登校児はほとんど犯罪者だったのだ。しかし、その後、他の従兄弟姉妹や親戚たちにも、それぞれ不運や試練は起きて行った。たまたま俺は挫折の時期が早かっただけで、人間、40代、50代にもなってくれば、必ず大きな試練の経験はやってくる。

母はできる限り、昔のことは忘れて、前向きにと考えているみたいだった。去年の地震のことも母は前向きに捉えていた。実家はマンションの11階なので、相当被害はひどく、しばらくは大変だったらしい。被災金もほとんどなかったとのことである。「仕方がないわ。他にもっと大きな被害に遭っている人は大勢いるから」と母は言っていた。あれがあったことで、母が嫁に来る時に持ってきたタンスなどもすべて崩れたのだが、それはむしろ良かったのかもしれない。母は自分が死んだ後のことも考えている人なので、母が死んだ後、あんな要らないものがたくさんあったんじゃ、同居している弟が大変だろうと心配していた。いずれは捨てなきゃいけないと思っていたものが全部なくなった。それに住み始めて25年以上が過ぎて、ちょうどリニューアル時だった。壁紙も全て張り替え、一皮むけたように実家は綺麗になっていた。あの地

震で死んだ人だってたくさんいるわけだから、こんなことを言っては怒られるかもしれないのだが、我が家にとっては、災い転じて福となすというところだったのかもしれない。同じ出来事が起きても、そのことが良い方向への転機になる人と逆の人と両方いるのだ。

俺にとっては少年の頃のジェンダー教育が悪い流れへの大きな転機だった。小学校の時の女教師、中学の時の体育教師、不登校の時のカウンセラー、40年経った今でも、彼らの顔が俺の中に蘇ってきては俺を苦しめるのだ。そして、この長年のトラウマを「あなたが殴られたわけじゃない。脱ぐのが好きな男もいる」と返してきた例のカウンセラー。彼女の顔が思い浮かんで、再び、不快な気持ちが胸に湧き上がってくる。あの女の顔に思い切りビンタを食らわしてやりたいと思った。「同じことが起きても人それぞれ受け皿は違うんだよー。なんでカウンセラーが、それくらいのこと分からないんだよー」

タクシーで家にたどり着いたのは夜の11時過ぎ。弟はもう寝ていた。母と深夜までしばらく話した。普段電話で話しているから特別変わった話はない。地震の時の話は気分が悪くなるだけだから避けた。久々にあった母は元気だった。すっかり老けているかと思っていたらそうでもなく足腰も大丈夫だった。弱っているのではないかと心配していたのだが、母の様子を見ると、まだまだ元気でいてくれそうだ。おばあちゃんは92歳まで生きたわけだし、僕のところは父方も母方も女性の方は皆元気だ。男の人は早死にした人も何人もいるけれど、女性はやはりたくましい。

「来年80だから、そろそろ将来、どうするかも考えなきゃいけないわねー」と母は言っ

た。俺は地震が起きた直後、京都に来たらと母に話していた。弟は婚活中。もう40代半ばだからチャンスは少なくてなかなか決まらないけど、パートナーができれば、母はむしろ邪魔になるかもと思っていた。「でも、今更私が友達もいない街で暮らすというのは辛いと思うわよ。もう1回くらいだったら京都まで遊びに行けるかとは思うけど」

おそらく母の事だから、誰にも迷惑はかけずに死んでいくだろう。母は自分のことはこの次で、人の世話だけで生きてきたような人だった。しかし、60過ぎてから、たまたま友人の勧めで始めた仕事が成功して、世界中を旅行する事になった。それまで海外旅行すら行ったことがなかった人なのだが、60代以降は一気に青春時代で、自分の人生をエンジョイしたようだった。苦勞の多かった母が、たくさんのお楽しみを味わってくれたのは嬉しかった。俺の方も普通の人に比べれば大きく遅れはしたものの、徐々に生活は安定して行った。弟は家族思いのできた弟で、母のことは安心して任せられる。そういう母や弟を愛しながら、俺はまだこの町を憎んでいる。この町のお墓に入るのには抵抗がある。50を過ぎた今、真剣にどこに骨を埋めるのか考えている。この町で眠らないのは、弟や母に対して薄情だけど、しかし、この忌まわしい町で眠るのは……。様々なことが頭の中をよぎっていった。

## 2. なぜ、ジェンダーをわかってくれないの？

夏休みに入る前のことだ。大学の食堂で食事していると、突然ある男の子が俺に話しかけてきた。その子は前に俺の授業を取って

いたことがあるとのことで、ジェンダーの話を知りたいみたいだった。話していると、たまたま俺と同郷だった。

「向こうはやはり、男が仕事頑張って、女がそれを支えるという考えは強いです。男は男らしくという伝統が強いから、中学の運動会の時も、男子全員上半身裸にさせられて、踊らされて、ウォーとか言われるんですよ。ガリガリの子だっているのに気の毒だった。服を着たまますりゃいいのにと思った」と話してくれた。

やはり偏見ではなかったのだ。

ちなみにこの会話は俺が先導したわけじゃない。俺は授業中にジェンダーの話はしているが、さすがに男の羞恥心の話はできない。この部分は、俺にとっては最もセンサティブなテーマである。レイプ訴訟を描いた『リップスティック』という映画の中で、アン・バンクロフト扮する弁護士が、ヒロインに「訴えたら、あなたは法廷でもう一度レイプされることになるのよ」という場面がある。忌まわしい経験を他人に話すというのはもう一度レイプされるのと同じ屈辱なのである。

夏休みに入る前、大学の控え室ではこういう話が起きた。「鴨川の水辺なんかを上半身裸で歩いている男の人いるけど、あれは女の人、どう思うのかね？ セクハラだと訴えられないのかなー」とある男性の先生が言い出したのだ。その先生はフランスに行かれていた経験のある人なのだが、フランスはヌーディストビーチがある一方で、公共の場で上半身裸になることは禁じられているというのである。へー、ヨーロッパに行ったことのない俺には新たな勉強だった。アメリカの男性だったら、どこでも、上裸になるので、欧米は皆そう

なのかと思っていたのだ。

ちょうど同じ頃、FBでこういうニュースがシェアされた。ある駅の前で、40代の女性が暑いからと下着になって体を拭いていた。これを公然わいせつだと訴えられたのだという話題である。これに対して、ややフェミニストがかった俺の女性の友人たちは「いいじゃないの。それくらい」というコメントをしていた。

なぜ、こういう非対称が存在するのか。女が脱ぐのは禁止される。男は自由に脱ぐこともできるが、強制的に脱がされるケースも出てくる。脱ぎたい女もいるし、脱ぎたくない男もいる。例のカウンセラーの「その時一緒に脱がされた子がいるじゃないですか」というセリフを思い出した。何度も繰り返すが、強姦と和姦では違うんだよ！！！！ ジェンダーに強姦されているのは女だけじゃないんだということ、そのことになぜ社会は気付いてくれないのか????

### 3. これからの人生

痛恨の思いを抱えたまま、人は一生を終えるのだろうか。

小林麻央さんが乳がんで亡くなって、その後芸人たちがステージ4であることを明かすケースが増えてきている。昔は日本ではひた隠しにするケースが多かったのだけど、今は告知を望む人が増えているようだ。

俺はどうだろうか。

やはりステージ4だと言われたら、相当にショックだろう。その一方でこれからの人生で何かすることがあるのかという気持ちも湧いてくるのだ。俺は数年前までは心の中で整

理がつかないものがたくさんあった。それが俺が勉強する原動力となってきた。自分の中のモヤモヤを解き明かすためにありとあらゆるカウンセリングを受け、本を読み、社会活動にも参加して、日々を120パーセントの力で生きてきた。ところが、最近になって気力が湧かないのだ。

思えば、若い頃は悩みの塊だった、不満の塊だった、不幸に紛れて、死ぬことなんて考えなかった。ところが今は幸せだ。俺は、考えてみれば、家族には恵まれている。男の友人にも本当に恵まれている。若い頃の俺からは考えられない。どんなに頑張っても誰からも相手にしてもらえなかった俺だが、今は相手にしてくれる人はたくさんいる。しかも、自分が親しくなりたいと思っている人と親しくなれる。もう10年くらいはそういう状況が続いている。女性嫌いは相変わらず治らないし、セックスレスの日々だが、人間関係は満ち足りている。ほとんど生活に不満はない。

一つだけ不満があるとすれば、男性ジェンダーの問題を誰も認めようとしないことである。これが少しでも社会の人にわかってもらえるのだったら、残された人生で俺は何かしたいと思う。しかし、今でも男性ジェンダーをめぐる状況は20年前と大して変わっていない。俺が70代まで頑張っても、状況は大して変わらないのではないかと諦念の思いを抱かずにはいられないのだった。

### 4. 断捨離

昔のトラウマは捨てなくてはならないのだろう。社会にそれをわからせることは無理なのかもしれないのだ。

久々の郷里では、マンションの窓から見えていたお城の天守閣がなくなってしまうていた。顔がなくなったような城になっていた。石垣も相当崩れているとのことだったが、天守閣の方はあと2、3年で修復される。しかし、石垣はあと20年以上かかりそうとのこと、「私が生きている間には完全には修復しないわね」と母は話していた。

俺の人生もそうなのだ。不登校から40年ぐらゐ過ぎて、顔の部分は取り戻したのかもしれない。しかし、裾にある石垣はまだちゃんとしていない。だからこそ、俺は女性と付き合い合えないし、失くしたものを修復するために、同一化できる男性を探し求めているのだ。

しかし、大抵の男性は俺ほど男の規範から外れた男性ではないし、俺ほどひどいジェンダー教育を受けていない、俺ほどジェンダーへの憎しみを経験していない、したがって、俺の気持ちはわかってくれても、それについて語り合うところまではいかない。人間って、孤独だなあー

とりあえず、要らないものは、捨てていこうと今の俺は考えている。断捨離である。

最初に断捨離したのは、日本育英会（日本学生支援機構）の借金だった。俺は博士課程の頃に借りていたので300万くらいの借金があった。払うお金のゆとりが全くなかった時代もあったし、定期的に払い始めてもからも1万2千円ずつくらいしか払っていなかった。なかなか返済は終わらなかった。その残金がついに7万5千円になったので、ちょっとでも早く身軽になりたいと7月の27日の引き落とし分ですべてを払った。これで大学にまつわる様々な怨念は終わりにしなくてはならない。

次にクレジットカードも使わないものは整理した。掃除も少しずつやっていて、できる限り、要らないものは捨てた。

そんなある日。突然、大阪に住む友人が俺の部屋に遊びに来ることになった。彼とは15年くらい前からの親友である。まだ一度も俺が今住んでいるところに来たことがないので、一度来ないかとかねてから話していた。その彼が突然来ることになった。俺の部屋は片付いてはいないが、学生の頃みたいにひどい状況でもない。

ところが、である。彼の目から見ると俺の部屋は足の踏み場もないと感じるらしい。「要らないものを置くからですよ」ということになり、彼は気持ちいいくらいにどンドン捨てていき、靴箱の空いている部分にDVDを入れ、カゴの中に本を入れてベッドの中にしまい、要らない本などは片っ端から捨てて、掃除機をかけ、1時間ほどで部屋は見違えるほどに綺麗になった。

彼と俺は同業なのだが、彼と俺の違いは、彼は要らないと判断したらすべて気前よくゴミ箱に捨てていくところである。俺はというと、いつだって迷う。もっと分別をきちっとしなきゃいけないのではないのか？これは個人情報だからシュレッダーにかけなくてはならないのではないのか？これは将来使うことがあるのではないのか？ そんなことばかり考えるので、掃除は進まない。どンドンモノや紙が増えて、鬱陶しい状況になってしまっている。

部屋が汚いのは、俺の心の混乱のメタファーなのだ。そういえば、学生の頃からそうだった。俺は悩みがあるときは何も掃除なんかできなかった。彼の手際よい掃除を見ている

と、劣等感を掻き立てられた。学生の頃に比べれば綺麗にするようになったと思っていたんだけど、第三者の目から見れば、まだまだカオス。これからは掃除も頑張らなくては！！！！心が落ち着かないから掃除しないのではなく、掃除をすれば心は落ち着くということなのかもしれないのだ。2年ほど前から人間関係のトラブルが相次いでいたのだが、そのおかげで悪い人間関係も整理できた。不要なものは全て捨てていって、最後に残ったものを大事にしよう。全て不要なものを断捨離すれば、さて、何が残るだろうか。

俺が女性と付き合わないのは、女性の前では自然体でいれないからだ。でも、これからは自然体で振る舞おう。そして、それを受け入れてくれない女性だったら、俺の方が断捨離する。そう割り切れば、女性との付き合いも強くなるだろう。

## 5『ぼくは明日、昨日の君とデートする』 (三木孝浩監督、2016)

この手の映画は苦手だ。女性に縁のない俺だから恋愛ものは基本的に嫌いだというのもあるが、とりわけこの手の恋愛ものは全くのファンタジーなので、ついて行かれなくなる。この頃、日本映画はファンタジー調が主流になってきたような気がするのだが、これは何故なのだろう。

嫌いなタイプの映画だけど、レンタルしたのは、まず何よりも京都が舞台であるということだった。京都がどう描かれているのか、京都在住歴 35 年近くなってきた俺には関心あるところだった。

この映画、京都を舞台にしていながら、京

都である必然性は全くない話であり、ただ京都はバックグラウンドとして使われたのだろう。観光映画というところだろうか。そもそもこの映画の不備は、京都弁、あるいは関西弁をしゃべる人が全然出てこないこと。主役の二人はもとより、脇の人物に至るまで東京弁で話すというのは、どう考えても変である。また主役の二人が三条大橋で待ち合わせして、みなみ会館で映画を見るというのも変(笑)！場所が全然違っている。ただ、こういう不備がわかるのは、俺が京都で長年暮らしているからで、つくづく京都のおじさんになったんだなあと確信して、その意味では満足だった。俺はずっと京都に新しい居場所を見つけようと思って、頑張ってきたのだから。

話は『ベンジャミン・バトン』風で、主役の二人の時間が逆行していく話である。これは男と女のメタファーなのかもしれない。男と女は交われる瞬間もあるけれど、交わっていないのである。あの例のカウンセラーも、男性ジェンダー＝男と見ていた。女性である彼女には、男がカッコつけるために、とりわけ女性の前ではどれだけ無理しているのかがわからなくて、自然体で生きる俺みたいな男に会うと逆に面食らってしまったのだろう。

俺は女嫌いだから、たまには女を面くらわせるのもいいかと思おう。そう割り切ってしまえば、腹も立たないのかもしれないのだ。

やはり、男であることは痛いです。